

新刊紹介

横川八重著／小國英夫監修社会福祉法人健光園編
『京都嵯峨 寿楽園日誌
—終戦直後に創設された養老院のドキュメント—』

A5判 / 472頁 / 定価 6,000円＋税 / 関西学院大学出版会, 2019年

今井 小の実

関西学院大学人間福祉学部教授

本書は、養老院¹⁾「寿楽園」の運営・実践に携わった横川八重による、その草創期8年間にわたる日誌の翻刻である。歴史研究では、「大きな物語」の終焉後、エゴ・ドキュメントを素材に個人の語りから歴史を読み解く研究が注目されてきた。日誌を翻刻した本書はまさに恰好の材料であるといえよう。

「寿楽園」の母体となったのは、1927（昭和2）年、本書の監修者小國英夫の祖父、小國安太郎が大覚寺境内覚勝院に設立した断食道場であった。戦後も安太郎の長男健治により「健光園嵯峨断食道場」として継承されてきたが、1948（昭和23）年3月、道場主健治が亡くなったことを受け、周囲の助言や支援を得て、養老院として創設されることになったのである。当時まだ小学生だった小國家の継承者に代わってその中心的役割を担ったのが、健治の妻静子と妹八重、そして親族たちであった。初代園長には、健治の一番上の姉婿、亀山弘應（高野山真言宗系の大僧正）が付き、二番目の姉婿谷山敬之も理事として設立当初の園を支えた。横川八重は小國家の三女として生まれるが、結婚によっていったん実家のある京都を離れている。だが終戦直後に夫と死別、京都嵯峨に戻り、兄とともに断食道場の運営に従事していた。そのため養老院設立の時には未亡人となっ

た静子とともに、起ち上げから実際の事業の運営にまでかかわり、1965年62歳で急逝するまで入所高齢者の世話をし、苦楽を共にしたのであった。

日誌の翻刻は、1948年12月23日の「松田先生、覚勝院様等より道場を養老院に切り替へてはどうかとの御話ありたるもあまり気乗せず」との書き出しから始まっている。敗戦直後の日本では、家や家族を失った多くの高齢者が行き場を失い、路上生活を余儀なくされるような光景がひろがっていた。しかし高齢者を保護する施設は当時まだ限られており、断食道場は消化器系の慢性疾患に悩む多くの人々の治療のために開設されたことから、高齢者の生活の場としても利用できるとみられ、養老院への転向を勧められたのであった。ちなみに松田先生とは医師として断食道場を支えてきた松田二三人を指していると思われる。松田は「寿楽園」開設後も、入所者の健康管理のために尽力し、日誌にも頻繁に登場する。

気乗りしなかった八重たちの心が変わったのは、日誌によると翌1949年1月25日、伏見区醍醐にあった、京都で最も古い養老院同和園へ訪問し、その実践を間近で見たからであった。その日の日誌には「病室に淋しげに寝てゐる人達を見た時、養老院をやって少しでもこうした気の毒な人達の為に残る命を捧げやうと云ふ気になる」とあ

る。もともと断食道場も病気で苦しんでいる人を救済したいという思いで開設されたのだから、養老院の事業は根幹のところで、創立者安太郎の意志にもつながっていた。娘の八重や親族が社会の要請を内面化し、決意するのも時間の問題だったのである。

それから法人として認可を得て本格的に事業を展開、「園生」と呼んだ入所高齢者に寄り添いながら事業を拡大し発展させていく様子が、日誌の翻刻が終わる1957年3月まで、実に8年間にわたり克明に記録されている。

このように本書は終戦後まもない時期の日誌の翻刻であることから、読み進めるにしたがって、占領下にあった京都の風景、そのなかで社会福祉施設を創設し運営することの困難さ、行政や医療をはじめとした公的機関や社会福祉系組織との連携、地域や企業との協力体制など、社会全体が生活の再建に向けて手さぐり状態にいた時代のさまざまな諸相が浮かび上がってくる。また施設が真言宗系の仏教者らの尽力によって設立・運営されていることから、これまでどちらかと言えば、キリスト教実践の研究に押され気味であった社会福祉の歴史に、仏教の実践を位置づける貴重な資料になる。何よりもエゴ・ドキュメントを素材にする強みとして、戦後の混乱のなか、誰もが戦災者、貧しかったこの時期に、市井に生きる人びとの人情、ぬくもりが感じられる日常的な助け合い、支援の数々、そして記録者八重の仏教の信仰に支えられた、人間味あふれる実践のエピソードに読み手は胸を打たれ、研究者は政治史や経済史では決してわからない当時の空気や匂いを感じることができる。

本書をひとことと言い表すなら「万華鏡」、見る人の属性や経験、問題意識によって、実にさまざまな風景を見せてくれる。ただ全く公開されることを予想しない個人の日誌であるために、その行間を埋める知識が必要となる。その一助として、本書の前半に収められた室田保夫氏、小笠原慶彰氏、山本啓太郎氏3人の社会事業史研究者に

よる論文、後身「健光園」の理事長でもあった小國英夫とその関西学院時代の先輩でもある岡本民夫同志社大学名誉教授との対談も、貴重な本書の水先案内人となるだろう。また用語解説と巻末の資料も、当時を理解するために有益であることも付け加えておきたい。

【目次】

はじめに

刊行によせて

『京都嵯峨 寿楽園日誌』を一読して一時代の風景を読む

室田保夫（京都ノートルダム女子大学教授、関西学院大学名誉教授）

生活保護法下の養老院—寿楽園の創設をめぐる山本啓太郎（元大阪体育大学健康福祉学部教授）

「寿楽園」創設初年度（昭和二十四年度）の実態について

小笠原慶彰（神戸女子大学教授）

対談「寿楽園日誌」が書かれた時代—戦後日本の社会福祉をふりかえる

岡本民夫（同志社大学名誉教授）×小國英夫（社会福祉法人健光園理事長）

寿楽園日誌

用語解説

昭和二十三～二十四年度

昭和二十五年度

昭和二十六年

昭和二十七年

昭和二十八年

昭和二十九年

昭和三十年

昭和三十一年

資料編

寿楽園に関する記録

あとがき

注

- 1) 本書の冒頭で小國は、「養老院」という用語について、制度上は生活保護法に基づく「保護施設」あるいは「養老施設」だが、文中では当時、人々が慣例的に使っていた「養老院」という用語を使うとしている。本稿もそれにしたがった。